

井上信一氏における仏教経済学の構築について

辻 井 清 吾

1. 初めに

井上信一氏は、自らの永年にわたる銀行家（日本銀行、宮崎銀行在職）としての業務環境を通じて、仏教と経済を融合する事を通じて、日本における仏教経済学の構築に努められた数少ない、経済人である。

「仏教経済学」は、E. F. Schumacher が「Small is Beautiful—Economics as if People Mattered—」の「Buddhist Economics」¹⁾を展開する迄は、実態の無きに等しいものであった。E. F. Schumacher の本質は、大量生産・大量販売・大量消費という地球環境の汚染・破壊を防ぐ中間技術の提唱と「正命」という正しい生き方の追求と実践の必要性にあった。井上信一氏も自身が信心する浄土真宗の立場からこの二つの問題を晩年に注力され、自らの仏教経済学の樹立を目指された。Schumacher 協会から同氏に論文を要請された事も高く評価された事を示すものである。その日常における研鑽の一端が駒沢大学仏教経済研究所であり、長年にわたる「歎異抄」研究の実践であったと言えよう。（表1）

表1 仏教経済学における井上信一氏とシューマッハ氏の比較

主要項目	井上信一氏	シューマッハ氏
基本的態度	キリスト教・西洋近代批判	西洋近代批判・西洋中世は肯定
依って立つ根拠	浄土真宗	ローマカソリック
キーワード	1) 二つの気づき 2) 「三つの柱」	「正しい生活」（正命＝生き方）
人間観	感謝・謝罪・自利利他円満	自己否定（懺悔）・利他主義
経済主体	自利利他円満	正しい生活
消費	少欲知足	最少の手段で最大の満足
財	宇宙からの預かりもの	一次財と二次財を区別
農業	宇宙の命に触れる	中間技術による開発に限定
職業経験	銀行員	経済顧問

（出所：駒沢大学仏教経済研究所編 「仏教経済研究」 第 30 号）

(10) 井上信一氏における仏教経済学の構築について (辻 井)

2. 同氏の説く仏教経済学の本質—「地球を救う経済学—仏教からの提言」から—²⁾

同氏が説く本質は、「二つの気づき」を基礎とした「三つの柱」を立て、自身の直観的視野を駆使した思索にある。「二つの気づき」とは、①「アリガタイ」(生かされている事に気づく)②「スマナイ」(生かされている事に気付かぬ自身に気付く)である。「三つの柱」とは、①「自利利他円満の経済学」②「平和の経済学」③「地球を救う経済学」である。この五つの精神から主著『地球を救う経済学—仏教からの提言—』において、「三つのスローガン」により仏教経済学の全体像を提起する。「三つのスローガン」とは①自利利他円満の経済学②平和の経済学③地球を救う経済学であり、元より完成されたものでなく、その趣旨は普遍的な視野であり、その精神的根底には、浄土真宗の信仰の立場があった。

E. F. Schumacher の同著の展開は、カトリックに立脚し、かつビルマ(現ミャンマー)政府の経済顧問としての長く、現実の経済に捉われず理想的な経済を追求した事に対して、同氏は長期の銀行員(日本銀行、宮崎銀行在職)の経歴を通じて、日本経済の現状を直視し、金融機関、労働組合の役割を肯定した上での仏教経済の意義を追求された事に両者の相違が明確である。五つの精神からの謙虚さを真摯に生き抜く姿勢は多くの人心を掴み離さなかった。

1) 「アリガタイ」と「スマナイ」について

同氏はこの二つの気づきは、「縁起の教理」の現代的表現であると示す。我々は宇宙、生物等の様々な物によって生かされている。「二つの気づき」は浄土教の「二種深心」の現代版で、「自灯明法灯明」の精神であると説く。

2) 三つのスローガンについて

まず、「自利利他円満の経済学」とは、経済行為において、「自分の利益だけ」ではなく、「他人様の利益の中で自分の利益を考える」という発想であり、親鸞著『浄土和讃』の「自利利他円満」の思想³⁾は宗教面と共に経済面にも、滲み出る地下水の如きものである。次に「平和の経済学」とは、仏教の一大特色に宗教戦争をした事がない事実がある。

「不殺生」の戒があげられる由縁である。「殺すなかれ」の戒律は全てのいのちを対等に見る徹底した平等観に基づく寛容の精神であり、仏教の教えは「～したい心からの解放」に置く事にもあろう。対外的な平和とは、先ず国内平和が保たれてこそ可能である。その精神はアショカ王が示された平和政策の第三に「徹底した寛容」と示され、現在はアショカ王の石柱として知られ、図柄はインド国旗

の紋章に採用されている。

その後、聖徳太子の『一七条憲法』に継承され、同十条において平和の根本精神が正しく把握され、仏教精神は現実の政策に影響を与えた。同氏は、第一条「和をもって貴しと為す」を日本的経営の真髓と意義づけた。

第三に「地球を救う経済学」とは、同氏は「仏教的な思想が、地球の危機を救うのではないだろうか、いや、私は仏教的な思想によってしか地球は救われない、と思うのだ」と語り、「一切衆生悉有仏性 草木国土悉皆成仏」と説く、仏教は、全てのものは宇宙という大きな命の一部と考える。現在「地球に優しい」という言葉が流行しているが、「地球にわびる」のが仏教の本心であり、この心の上に立つ経済学こそが、「地球を救う経済学」であり、カネを中心とした経済学に「命」が入らねばならぬ時が来ていると考える。

同氏は各論のキーワードとして、同書内で、消費、労働と労働組合、競争、生産と仕事、家計、財、カネ、自由等を掲示して、各章から仏教経済学を展開した。本論では、次の3点を概要したい。

3. 「モットイナイ」と「少欲知足の幸福」について

「モットイナイ」（勿体ない）は昨今の流行語であるが、仏教経済学は、宇宙に包まれた人間と経済とを問題とし、現実の経済活動の根本は「消費」であると考え、消費の因ってたつ源は欲望であり、欲望には個体保存欲（食欲）と、種族保存欲（性欲）がある。仏教ではこの基礎的な欲望を肯定し、これから生命を保たれていると表す。「末那識」と結んだ自己中心欲を「自我へのとらわれ」・我執と称し、最も警戒する。「勿体ない」という言葉こそ仏教経済学の消費に対する考えを集約したものと提起する。

哲学者のカーライルは「経済的幸福」とは財を分子に、欲望を分母とする分子式で表し、分子は算術級数式に、分母は幾何級数的に増加すると付言した。分子を大きくする事によって、幸せになろうとするのが欧米式であるとすれば、分母を小さくしようとするのが東洋式、仏教式である。これは、ブータンのGNH（国民総幸福量）に共通するものがある。

仏教経済学の消費観は欲望の抑制、「少欲知足」を提唱する。龍安寺のつくばい「吾唯足知」に正に示され、それは生かされている現われへの感懷でもある。仏教では、足るを知ることを知るのは贅沢な英知であり、逆に足ることを知らない心情は餓鬼とされる。「モットイナイ」こそ、仏教経済学の消費に対する考え方を集約したものであり、現代経済学では、生産、利益が多いほど、優良といえ

(12) 井上信一氏における仏教経済学の構築について (辻 井)

るが、仏教経済学では、地球上の生きとし生けるもの全てを活かしているかどうか重要な尺度であり、地球環境保全への貢献度でもある。消費量は決して幸福の尺度でない事を一刻も早く我々が気付かねばならない。「モッタイナイ」とは、夫々の存在の尊さ、値打ち、いのち等の価値を無駄にする事であり、利益とは道元が自著『正法眼蔵』の中で、「愚人思わくは利他を先とせば自らの利省かれぬべしと。爾にはあらざるなり。利行は一法なり。普く自他を利するなり」と記し、本言は自利利他円満の実践であり、「利益の追求は自利と利他が一つになった行為」の意味である。正に、利益は目的ではなく結果である事を語るものである。

4. 家計について一分かつ心が原点一

近代経済学では、消費の大きさが幸せの大きさを決めるとの考えがあり、それは、現金収入を増加させる事が中心課題であり、国民総支出（GNE）の大きさが各国の幸せの尺度であるとの思い込みがあった。仏教経済学では、家計こそ人間が独立して生きる基本である事は、「人は、だれでもその家計のことについては、専心に蟻のように励み、蜜蜂のように努めなければならない。いたずらに他人の力をたのみ、その施しを待ってはならない」と、『六方礼経』に記されたことばである。家計のあり方が、個人とその家庭を条件付けると言っても過言ではない。近代経済学では消費の大きさが幸せの大きさを決めるとの考えがあり、現代の社会問題（主婦のパートタイム、子供の鍵っ子）等は、仏教経済学として問題にせざるを得ない所以となっている。仏教では、布施を大切にし、分かつ物がなくても「無財の七施」も立派な布施とされる。釈尊は、財の四分法を説き、収入を家計費、社会的支出、運転資金、貯蓄に分ける事を勧めている。

5. 福祉について

仏教は日本の近代化推進の過程において、明治初期には、貧困・公害に苦しむ人々に対し社会政策として殆ど役割を果たしえず、明治30年代になって、仏教の慈悲観を近代社会に位置付ける事が主張されたが、清沢満之は「慈善をする」と戒め、慈善を自利利他一如の如来による慈善として捉えた。仏教経済学の福祉は、全ての人が仏の子であるとの自覚から出発する事が必要であり、強者から弱者への憐みで行われるものではないと説いた。

6. 同書に見る人物像

同氏が同書にて記述された人物は、実に50余名に及ぶ。特に、聖徳太子、空海、最澄、親鸞、道元、石田梅岩、鈴木正三、二宮尊徳、洪沢栄一、仏教的経営者⁴⁾として、伊庭貞剛（住友財閥の二代目総理事）、伊藤忠兵衛（初代・二代、「菩薩道」

志向),「自利利他円満」を実行した正力松太郎(読売新聞社主)・吉田忠雄(YKK創業者)・新庄鷹義(富士ダイス創業者),丸田芳郎(花王会長,聖徳太子の精神による経営),野口喜一郎(合同酒精社長)加藤辨三郎(協和発酵工業会長,『歎異抄』研究者),岩切章太郎(宮崎交通創業者),労働組合運動において,小松乗正(協和発酵工業労組委員長)地方において,山浦啓栄(足利市),星野精助(高崎市)等を事例としてあげ,日本の土壌と風土に根ざした日本的仏教経済学の構築を志向した同氏の顕著な問題提起・意識が示される。

同氏が自らの人生に信仰活動を実践活動としたのが,『歎異抄』との出会いであり,日本銀行時代に「歎異抄研究会」を発足,その支援者が野口喜一郎氏と加藤辨三郎氏(在家仏教協会創立者)であり,宮崎銀行時代の岩切章太郎氏との仏縁であり,沼田慧範氏(ミットヨ創立,仏教伝道協会創立者)の『仏教聖典』の世界的普及へと継承された。この背景には,「正しい生き方」への日常の業務活動と並行した仏教経済学への構築・実践への涯なき追及であった。

7. 最後に一現代における同氏の発展のあり方一

昨今の経済・社会情勢からして,同氏の思想の原点である「モットイナイ」と「少欲知足」の重要性が強く問われている。20世紀は貪欲の世紀といわれ,21世紀は知足の世紀と言えよう⁵⁾。

地球では地球本来の持続可能な水準内に,国では,成長を考慮する経済運営・管理,企業では自利利他円満を実践し,資源(物的・人的)の有効活用,個人では日常のライフサイクルとしての食膳の食べ残しをしない事が同氏の思想構築を推進する源泉と言えよう。

1) E. F. Schmacher, *Small is Beautiful-Economics as if people Mattered-*, Harper Perennial, 1973 pp.56-66

2) 井上信一『地球を救う経済学—仏教からの提言』すずき出版, 1993

3) 東本願寺『真宗聖典』東本願寺出版部, 1999, p.482

4) 井上信一『仏教的経営—心と物を活かすリーダーたち—』すずき出版, 1987

5) 武井昭他『仏教経済研究 第30号』駒沢大学, 2001

〈キーワード〉 仏教経済学, 知足少欲, 勿体ない, 二つの気付き, 三つの柱
(桜美林大学講師)